山地の墓、あるいは平地の墓

岩松　保

1．はじめに

弥生時代前期以降から近畿地方北部には台状墓が築造されており、近畿地方中央部以東に広く分布する周溝墓と対比されている。台状墓は丘陵尾根上に、主として溝と地山整形によって台状部を造り出して死者を埋葬するものであるが[注1]、周溝墓とその形態や規模、被葬者数が類似することから、周溝墓と台状墓は基本的に同じもので、台状墓が山尾根上、周溝墓が平野という立地の差があるといった程度の“地域的な変種”と捉える考えが一般的である[注2]。しかし、たとえ台状墓と周溝墓とを同一のものと捉えたとしても、なぜ地域的な違いが見られるのか、その差異は何を反映しているのか等を検討し、その“地域色”の意義を探求していく作業が必要であろう。

この小論では丹後地域を中心にした台状墓を造営する社会を主として検討するが、方法としては、台状墓に周溝墓を対置させてその相体的な位置を探りたい。我々が事物を認識するためには、それとは違った対照物が必要であり、対照物との比較を通じてその事物が“相対的に”認識されるからである。周溝墓と台状墓を意識的に比較し、その差異が有意であるか否かを判断した上で、それぞれの墓制の特色を明らかにし、今まで“暗黙的に”行ってきた台状墓と周溝墓の“相違”を積極的に評価していきたい。そして、それぞれの地域における観念の相違がそれぞれの墓にどのように現れているかを見ていきたい。

2．周溝墓と台状墓の観念

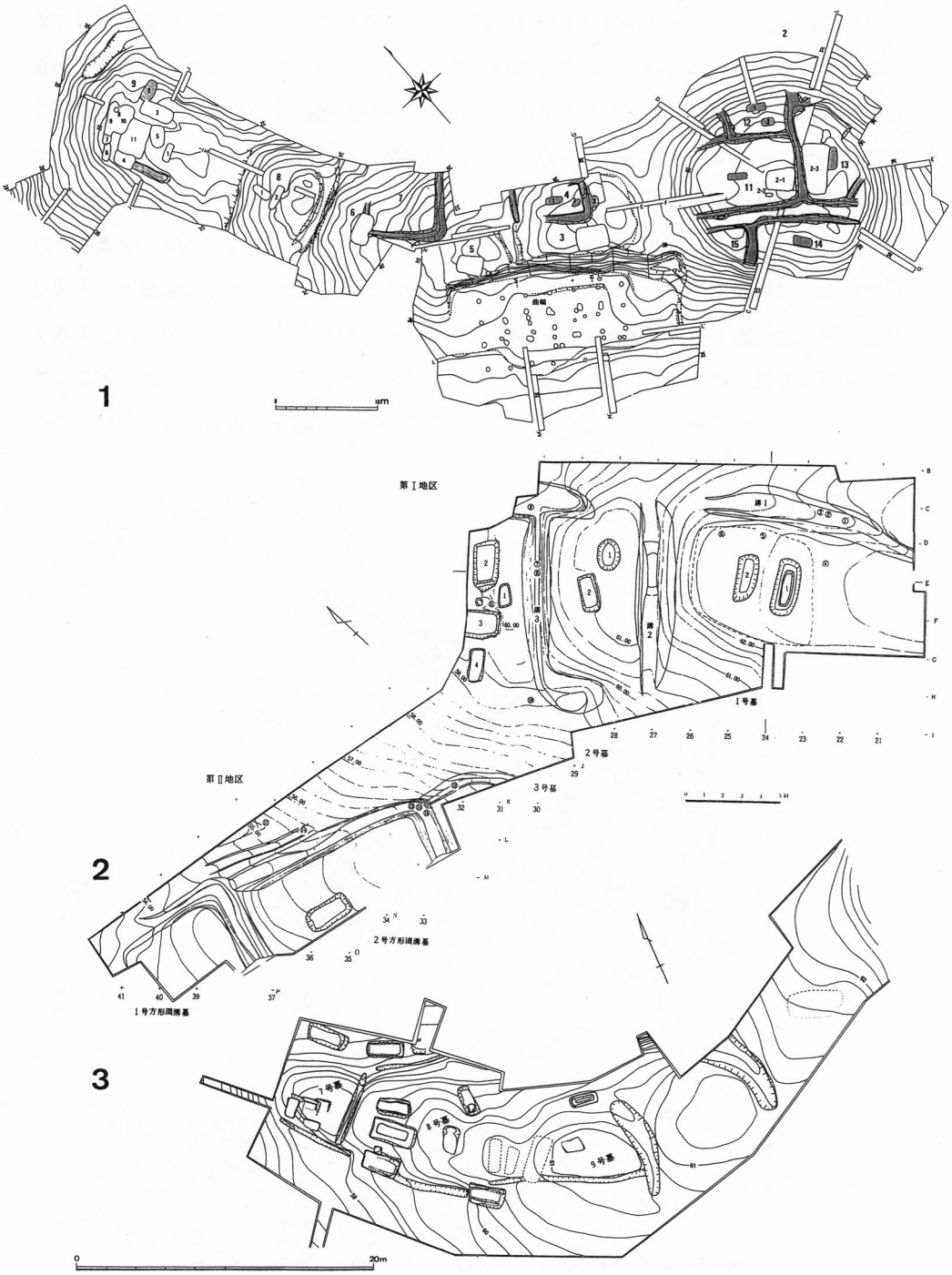
周溝墓は近畿地方中央部、台状墓は近畿地方北部というように初現の地域が異なるにも関わらず、その出現時期はともに弥生時代前期後葉と考えられている。まず、周溝墓と台状墓が“区画墓”として一義的であることを見ておこう。

京都府中郡峰山町七尾遺跡は平地との比高差30m程度の山尾根に立地している。ここでは前期末の台状墓群が検出されているが、江戸時代の供養塚により地形が大きく改変されており、当初の形状には不明瞭なところがある(田中・林1982)。兵庫県豊岡市駄坂・舟隠遺跡群も前期末に比定されるが、調査により10基以上の“周溝墓”が群集していたと復元

されている(第１図１；瀬戸谷・宮村ほか1989)。この遺跡も比高差約30mの山尾根に立地しており、居住に適した平坦地は山上にはなく、居住域はおそらく低地に位置していたのであろう。近畿地方北部における初現の弥生墳墓の中に、台状墓とともに“周溝墓”が見られる点は興味深い。それは、周溝墓と台状墓(これらの術語は現在の考古学に携わる我々が範疇分けをしているものだが)が、当時の人々にどのように認識されていたかを考える手がかりとなるからだ。ここで近畿地方北部における“周溝墓”の類例を見ておこう。

峰山町カジヤ遺跡では中期後半の台状墓と後期の周溝墓が同一の丘陵上で調査されている(第１図２；増田・田中ほか1978)。報告書中には、台状墓群は「丘陵尾根上をうまく利用して、尾根に直角に溝を掘って方形台状に整形して」おり、周溝墓群は「なだらかな斜面につくられ、一部溝を共有しているものの、方形に溝をめぐらし、いわゆる周溝墓の形態を示している」と記されており、周溝墓、あるいは台状墓と我々が認識している墓制が、それぞれどのような場所に造られているかを端的に示している。同じ丘陵上であっても、幅の狭い尾根筋上には台状墓が、やや広い平坦面には周溝墓と“我々が認識する”ハカを“築き分け”ているのである。丘陵上でいわゆる“周溝墓”と台状墓が併存する例には、兵庫県朝来郡山東町柿坪墳墓群、綾部市久田山墳墓群などがあり、場合によっては普通に認められるものである。さらに、台状墓に“周溝”を看取できるものがある。中郡大宮町の帯城墳墓群のＡ地区７・８・９号墓では尾根に直交する方向に加えて、尾根筋に平行する側辺にも溝が穿たれている(第１図３；岡田ほか1987)。豊岡市立石墳墓群103号地点の台状墓では、北東・南東辺にＬ字状の周溝が検出されている(瀬戸谷編1987)。先述のカジヤ遺跡にあっても、台状墓の側面にも溝が掘削されている。

以上の例から、少なくとも近畿地方北部にあっては、台状墓、あるいは周溝墓と我々がそれぞれを認識するような形態・築造方法の違いは、これらを築造した当時の人々にとって本質的で絶対的な違いではなかったことが推測できる。すなわち、台状墓は丘陵尾根上で“他の台状墓や外界から区画する”意識を尾根筋に直交する方向に溝を掘削することで表したと考えられるが、これは狭い丘陵尾根という地形的な制約から生じたことであり、やや広い平坦面上では区画溝を四周に掘削し“周溝墓状”にする必要があったのである。このことから、台状墓や周溝墓は、溝によって外界と分け隔たれた“区画墓”として一義的な意味があり、その平面形態や築造法、溝の掘削位置などには一義的な意味がなかったと言えよう。このように考えると、同一の丘陵上に“周溝墓”と“台状墓”が築かれることも了解できる。また、京都府竹野郡弥栄町奈具岡遺跡の“周溝墓”群は丘陵平坦面に造られており、一見して周溝墓と認知されるものであるが、これなどは墓域が占める地形が許せば台状墓→周溝墓と変化しうることを示している例であり、先の考えを傍証するもの



第1図　山地の“周溝墓”

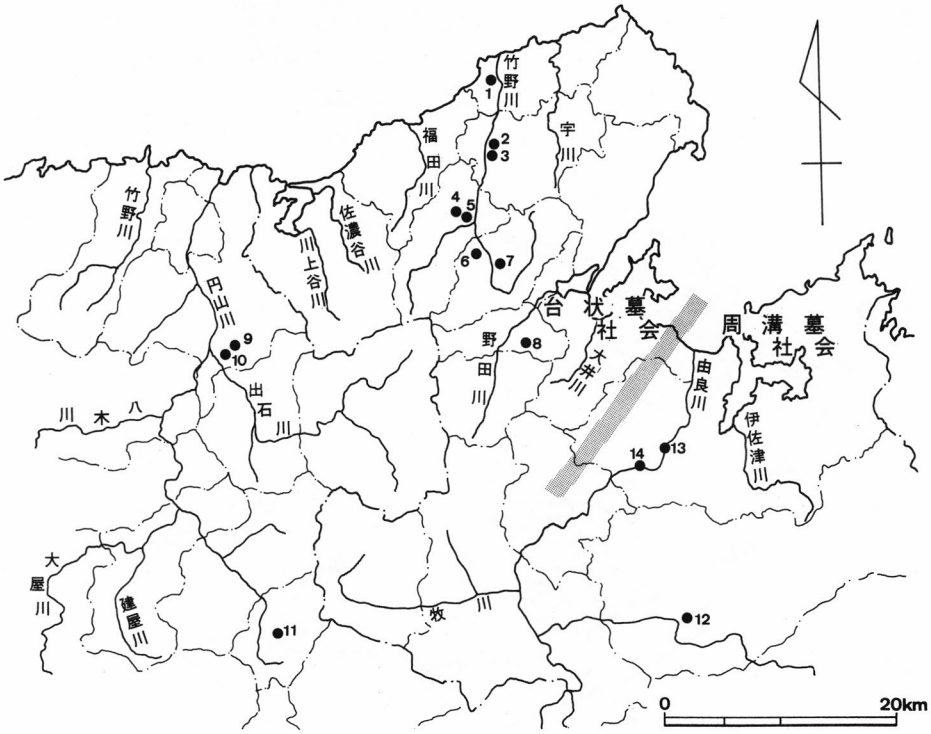
1.駄坂・舟隠遺跡群　2.カジヤ遺跡　3.帯城墳墓群

（各報告書より転載、一部加筆）

である。

そうすると、台状墓と周溝墓の違いは、現代に住まう我々の認識の上での違いだけであって、そこには何ら当時の人々の考えの違いを反映していないのだろうか。先の考えが正しいとすると、台状墓と周溝墓の本質的な相違は、その立地に求められよう。区画墓の立地の違いが、一方では台状墓に、もう一方では周溝墓となったと考えられるのである。すなわち、台状墓は細い尾根上で区画墓を造ったがゆえに台状墓(と我々が認知する墓)になったのであり、またならざるをえなかったのである。一方、周溝墓は平坦地に区画墓を造ったがゆえに周溝墓(と我々が認識する墓)となったのである。台状墓と周溝墓という違った墓制が、近畿地方中央部と北部というように地域的に分かれて造られているが、大きくは“区画墓を築造する地域”という意味で同じであり、小さくは“墓域の立地をどこに求めるか”という点で異なっているのだ。以上のことから、台状墓・周溝墓はともに区画墓として、

区画墓；うち：そと＝あの世：この世



第２図　近畿地方北部における台状墓と周溝墓(本文引用のもの)

1.大山墳墓群　2.奈具遺跡　3.奈具岡遺跡　4.カジヤ遺跡　5.七尾遺跡
6.小池墳墓群　7.帯城墳墓群　8.寺岡遺跡　9.立石墳墓群　10.駄坂・舟隠遺跡群
11.柿坪墳墓群　12.久田山墳墓群　13.志高遺跡　14.桑飼上遺跡

を表徴しているという点で同じなのである。

そうすると、山地、あるいは平地といった立地の差はどういう性格のものなのだろうか。それぞれの環境条件によって決定されるような可逆的で流動的な性格なのだろうか。一方の墓制がもう一方の地域に伝播し、そこでの環境条件の違いにより墓の立地が変化したのであろうか。具体的には、周溝墓が丹後地域に伝播し、その地域の環境――狭小な平野という条件のために区画墓の立地が平地→山地と変容したという考え方、もしくは、台状墓が近畿地方中央部に伝播し、それが山地がないために平野に造らなければならなかった＝周溝墓の成立という考え方のどちらかなのだろうか。これについて、舞鶴市志高遺跡・桑飼上遺跡を例に見てみよう。これらの集落は狭小な平地に立地しているにも関わらず、周溝墓を築造している例である。両遺跡ともに由良川の自然堤防上に立地しているが、幅約500mの狭小な平野であるにも関わらず、志高遺跡は弥生時代前期後葉から、桑飼上遺跡では中期から周溝墓を築造している。この平野は丹後地域の平野と較べてもはるかに狭小なもので、平野の狭小さが台状墓を造る必要条件であるならば、当然台状墓を造っても良いはずであるのだが、事実はそうではない。また逆に、台状墓→周溝墓という伝播を想定しても、京都盆地や大阪平野などの縁辺部において、集落の背後に山地が存在している場合であっても、墓域は居住域とともに平地に設けられて周溝墓が築造されており、台状墓＝山地の区画墓が造られているのではない[注3]。このように、山地に造る墓、あるいは平地に造る墓は、平野の狭小さや山地の有無によってムラ毎に築き分けられているのではなく、地域によってどちらの墓を造るかが厳然と守られているのである。それは環境条件によって、平地←→山地と墓域の立地を容易に変えるようなものではないのだ。以上のことから、一方の墓が他方の地域に伝播し、その地の環境条件に合わせて墓地の立地を変化させたとは考えられないのである。それぞれの墓がそれぞれの地域に出現した当初から、周溝墓、あるいは台状墓の立地は平地、あるいは山地と固定的であったのであり、それゆえ、周溝墓、あるいは台状墓の立地の差はそれぞれの墓を考察する上で重要な要素となるのだ。

周溝墓；平地の墓

台状墓；山地の墓

次いで、集落内の墓域の位置を居住域と対比して見ると、周溝墓を築造する近畿地方中央部では、居住域(集落を構成する要素のうち、主として住居に供される空間)と墓域(埋葬に供される空間)とは、若干の空閑地や環濠を隔てて“同一平面上”に隣接しているのが通例である。これに対して近畿地方北部の台状墓を築造する地域では、居住域と台状墓の墓域とは、“同一平面上”で隣接していない。これは、弥栄町奈具岡遺跡や奈具遺跡などのように、丘陵地に居住域が立地している場合でもそうである。この地域では、丹後町

大山墳墓群の調査で確認されているように、丘陵上に居住域、背後の比高差15～20m程度の山尾根上に台状墓の墓域を配するのが一般的であると推測される(平良ほか1983)。居住域と墓域は、いわば、“立体的”に隣接しているのである。このように、平地の墓、あるいは山地の墓といっても、それはそれぞれの墓域がその場所にただ単に占地しているだけなのではなく、居住域と墓域の“配列関係”がそれぞれの地域で異なっていることに関連していると考えられるのである。

周溝墓社会；居住域：墓域＝平地：平地＝平面的配置

台状墓社会；居住域：墓域＝平地：山地＝立体的配置

そうするとなぜ、それぞれの地域で山地、あるいは平地に墓域を設定したのであろうか。それは、そういった場所に墓を造らなければならないとそれぞれの地域で“考えられていた”からであろう。人々が居を構える場所は、水はけや日照、飲み水の有無、水田の管理やその作業の便、その地域の集団との関係など、様々な条件を総合的に勘案して占地されたであろう。そういった条件にかなう居住地を基点として、近畿地方北部ではその背後の山地に台状墓の墓域を設け、近畿地方中央部では同一の平面上で周溝墓の墓域を設定したのである。近畿地方北部の“山地に墓を造らなければならない”という観念を重視すると、おそらく居住域の設定の段階から墓域の場所を考慮に入れていたのであろう。そして、こういった居住域と墓域の配置が近畿地方北部と中央部で地域的な広がりを持って斉一的に見られるということは、その配置の構造が偶然的なものではなく、何らかの観念――おそらく、この世とあの世という死生観を反映しているのであろう。こういった死生観は、おそらく当時の人々の宇宙観・世界観と関連していたものと推測される。“周溝墓”と“台状墓”の分布の違いは、平地に区画墓を築造しなければならない“観念”と山地に区画墓を築造しなければならない“観念”の違いを反映しているものと考えられるのである。それぞれの“観念”を有した集団社会の境界は、京都府北部では先述の志高遺跡や桑飼上遺跡が立地する由良川流域が相当し、この川の流域以南が周溝墓＝平地の墓、北側が台状墓＝山地の墓を死後の世界とする観念を有した社会なのである(第２図)。このように考えると、志高遺跡や桑飼上遺跡では、狭い平野であるのにも関わらず周溝墓を築造しているのかが理解できよう。各地のムラムラが“自由に”どちらかの墓を選択できるようなものではなかったのである。このように、ほぼ同じ時期に出現した台状墓と周溝墓は、その出現当初から山地と平地という墓域の選定の違いが反映しており、その背後には“死後の世界観”＝宇宙観の違いが反映していたと考えられるのである。図式化すると

台状墓社会；あの世：この世＝山地：平地＝高：低

周溝墓社会；あの世：この世＝平地：平地＝低：低

である。

今までの議論により、周溝墓と台状墓とが立地している場所の違いには、両地域に住まう集団の意識の差＝観念の違いが反映していることが明らかとなった。

3．縄文墓制と台状墓・周溝墓

台状墓と周溝墓は、一方が他方から発展した“地域バージョン”でないことは、その立地――世界観が異なっていることから論じた。ここでは、在来の日本列島の文化――縄文文化から台状墓と周溝墓が生み出される下地があるかどうか、何が受け継がれ何が変化したのかを簡単に見ておこう。

縄文墓制で近年注目されているのが、集落の中央に墓域を有し、その周囲に居住域があるタイプのものである。こういった集落に典型的に見られるように、縄文集落の居住域と墓域は、“同一平面上”に隣接しているのが通常である。こういう意味では周溝墓社会と同じ構造である。

縄文集落；あの世：この世＝平地：平地＝低：低

しかし、縄文集落には弥生集落と違って居住域を巡る環濠や墓自体を区画する溝も有していない。この点で見ると、縄文社会のあの世とこの世は連続的であり、そこには断絶がない。

縄文墓；非対立的

弥生区画墓；うち：そと＝あの世：この世＝対立的

である。以上の点から縄文集落と弥生集落への変化を図式にまとめると、

縄文社会→弥生社会＝無区画墓→区画墓＝非対立的→対立的

である。しかし、集落における居住域と墓域の関係は縄文集落と周溝墓社会とは同じであり、そこには集落構造の違いはない。一方、台状墓社会は

台状墓社会；あの世：この世＝山地：平地＝高：低

であり、そこには縄文集落と集落構造上の違いが認められる。

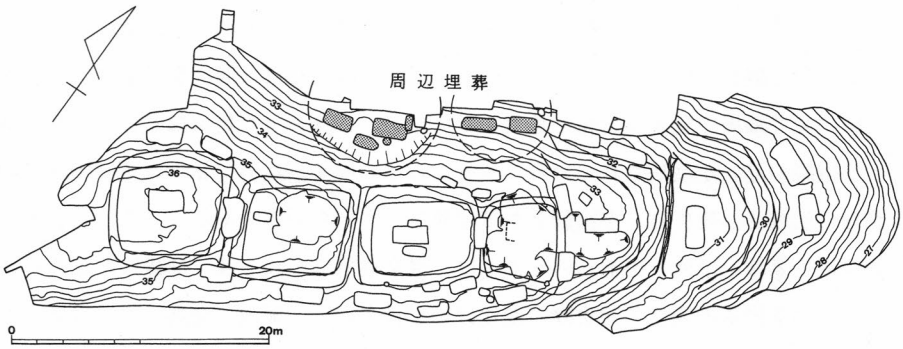
もし、区画墓(うちとそとの構造化)の出現という要素が稲作の導入・定着に伴う農耕革命による社会と観念の変化に伴うものであるならば[注4]、縄文社会と周溝墓社会とでは集落構造――居住域と墓域の配置に変化をきたしていない。こういった集落構造に“死後の世界観”＝宇宙観の違いが反映されているとするならば、周溝墓集落に見られる宇宙観は縄文時代からの伝統的な死生観・宇宙観とさほど異なっていないのである。一方、台状墓社会は、居住域：墓域＝平地：山地というように、縄文集落のそれとは“飛躍”が認められる。こういった集落構造の変化＝死生観の変化は縄文社会から“漸次”発展したとは考えにくい。この変化が区画墓の出現と同じく、弥生文化の定着に伴い社会に生み出されたものか、

大陸からの人口の移住によって形成されたのかは、よく分からない。このことについては、後ほどに若干触れることとし、ここでは縄文社会から弥生社会に移行するに当たって、伝統的な世界観・宇宙観がそれぞれの地域にどのような影響を与えたのか、の可能性を指摘するにとどめたい。

４．台状墓社会と周溝墓社会

近畿地方中央部の周溝墓を造営する社会と近畿地方北部の台状墓を築造する社会とを集落構造・墓域の構造から検討したい。近畿地方中央部の周溝墓社会の構造については、単位墓―単位墓群―小墓域－墓域という入れ子構造を設定し論じたことがある(岩松1992a)。単位墓を単位集団の一世代の墓、単位墓群をそれが累世的に造られた集合体、小墓域は複数の単位墓群が集合した墓域で、周溝墓社会の集落では複数の小墓域が居住域の周囲に近接して分布していることを明らかにした。そして、複数の小墓域の存在から、ムラの内部が複数の小墓域集団に分かれており、それが時期を経て階層的に成長することを指摘した。同じ視点で、丹後町大山墳墓群を例に台状墓群を見てみよう。

大山墳墓群３～８号墓は弥生時代後期の台状墓で、丘陵の一支尾根に立地しているが、この独立丘陵上にはこれ以外に同時期の墓域は設けられていない。この墓所は、①山尾根上に６～７基の台状墓(報告では６基)、②台状墓の裾や溝内に裾部埋葬・溝内埋葬、③台状墓の外に埋葬された２～３群の周辺埋葬、に分類できる(岩松1992b)。②の溝内埋葬と裾部埋葬を台状墓に“付随する”ものと考え、①の台状部に埋葬された１～２基の埋葬墓と合わせると、①と②で“家族墓”的な様相を呈しており、それぞれの台状墓と周囲の埋葬墓群が一単位墓と推定される。③の周辺埋葬のそれぞれの群はそれ自体で家族墓の様相を示しており、それぞれが一単位墓と考えられる。周辺埋葬に分類した２～３基の単位墓を一家族が累世的に築造した単位墓群と捉えると、２～３世代の単位墓が累積したものと



第３図　竹野郡丹後町大山墳墓群３～８号墓周辺埋葬の分布(平良・黒田ほか1983より一部加筆)

考えられるので、同じように台状墓群も２～３世代の集積の結果とすると、台状墓群は３～２単位墓集団が造墓したものと推定できる。以上のことから、この墓所は３～４家族が２～３世代にわたって利用したことが推定される。後述のように平地にはおそらく土壙墓を主とした共同墓地が存在したと推定されるので、台状墓を主とする小墓域と共同墓地の小墓域とで一つの集落の墓域を構成していたのであろう。さらに、この独立丘陵上では同時期の墓所が他にはないことから、台状墓を主として築造する小墓域は一集落につき一ヶ所が定められていたのであろう。(注5)

このように分解すると、台状墓社会でも単位墓―単位墓群―小墓域―墓域となり、周溝墓社会と同じ構造を有していることが分かる。しかし、台状墓を築造するのは山地にある一小墓域のみで、他は平地の共同墓地に埋葬されたと考えられる点に、台状墓社会と周溝墓社会との違いが見て取れる。これはなぜだろうか。集落規模の違いなのか、もしくは区画墓を造る階層が異なっているのだろうか。

丹後半島には、竹野川、野田川、佐濃谷川、川上谷川、福田川などの中小河川に沿って小平野が“数珠状”に形成されており、この地域にはいわゆる“大平野”は認められない。久保(1988)は、丹後地域の台状墓と集落の関係について、「その様相は単に中核となる集落の周辺に多く営まれるといったものではなく、各地に点在する小単位毎のムラで営まれた墳墓群が極めて多くの数になるという傾向を示している」とその特色をまとめた。この傾向は発掘調査件数が飛躍的に増加した現時点にあっても、否定されるものではない。久保によると、丹後地域の狭小な耕作可能地という地域特性のもとで、「死後の世界を画する墓域というものを集落近辺に設定しなければならない」という命題と「水田耕作可能な土地を少しでも多く確保して行かねばならないという社会的要求」との妥協の中で山地の墓＝台状墓が生みだされたと指摘し、台状墓の出現に際して“狭小な平野”という環境条件を重視した。しかし、久保の考えは丹後地域での台状墓の成立についての説明には有効ではあるが、同じ近畿地方北部で台状墓を築造している豊岡市域など、広い平地が開けた“平野部”での台状墓の成立と展開を説明できない。

筆者は、死後の世界を山地に求めたことが近畿地方北部で台状墓が成立した直接の原因であり、このことがその後のこの地域の社会を規定したと考える。それは以下の考えによる。縄文社会から弥生社会に変化すると、近畿地方北部ではそれ以前の死生観に変化が生じた。縄文社会(や周溝墓社会)でのように、この世とあの世を同じ平面上で捉える観念から、高：低の立体的な関係性の中で死後：現世を捉える考え方である。近畿地方北部の弥生時代に、現世と死後の世界という観念がなぜこのように変容したかはよく分からない(が、これについては後述する)。しかし一旦、死後の世界＝高＝山地と捉える観念が近畿

地方北部で成立すると、その枠組の中で山地に区画墓が造られるようになった。これが台状墓の成立である。しかしこれは先に見たように、周溝墓社会のようには一般的な墓制ではなかった。この点を考慮すると、高＝山地＝あの世という観念は“誰でもが死後に行く世界”として認識されていたのではなく、一部の人、おそらくその集落(または集落“群”)の首長や司祭(の家族)といった選ばれた人が行くべき特別に聖なる“世界”と考えられていたのであろう。ここで注意を惹くのが、与謝郡野田川町の寺岡遺跡で見つかっている土壙群である。これは時期的にやや遅れて弥生時代後期の例であるが、これが共同墓地だとすれば(福永1989)、一般民衆は平地に葬られていることとなり、山地＝台状墓：平地＝土壙墓という図式の中に首長・司祭(の家族)＝山地の墓：民衆＝平地の墓という関係が表れていると言えまいか。

さて、“居住域の背後の山地には(特別な首長・司祭及びその家族の)小墓域を設定しなければならない”という観念は、いきおい、居住域の占地に規制を加えるようになり、丘陵上や山裾、山間の狭い平地といった場所を居住域に選ばざるをえないようになった。平地の“真中”は避けられたのである。居住域をそういった狭い場所に占地したことが、“自由”に拡大しようとする集落の展開に制限を加え、そのため、ある程度の集落規模になると、その都度集落は分裂し、“適切”な場所に“適切な”規模で新たな集落を設ける必要があったのだろう。居住域の背後の山地上に“特別な”小墓域、前面の平地には生産域とおそらく共同墓地が広がっていたのだが、こういった集落内の配置構造を保つ必要性が、平地の中で“自在に”集落が展開していくのを阻害したのである。こういった理由のため、丹後地域には大集落が認められずに、いわゆる“小集落”が数多く成立したのであろう。特別な小墓域＝山地という立地が、集落の自由な発展を制限したのである。

それに対して近畿地方中央部の周溝墓社会は、居住域を中心に墓域・生産域が同心円的に同一平面に分布しているため、それぞれの要素が他の要素に制限を加えるような関係ではない。集落のそれぞれの領域は空間的に固定された関係なのではなく、居住域が“自由に”外側に向かって拡大することが可能な集落構造なのである。久保(1987)が指摘するように、周溝墓社会は「墓域そのものも時代と共に耕作地並びに居住地の展開によっては押しのけられ、その所在を点々と変化させていく」といった“可塑性”を有していたため、集落の拡大を事実上は“無限”に許容するキャパシティを有していたのである。ここに大集落が成立する条件があったのであろう。そして、墓域が複数の小墓域に分割されているあり方は、それぞれの“小墓域集団”が、丹後地域に見られる“小集落”に相当するのかも知れない。

先に保留しておいた、近畿地方北部における縄文社会から弥生社会への死後の世界観の

変容について、簡単に筋道を示しておこう。最近、韓国でも周溝墓が検出され、台状墓・周溝墓が一連の農耕文化と共に大陸からもたらされた可能性が指摘されている。(注6) この可否については、その詳細が不明であるので論じられない。しかしながら、“区画墓”の起源が大陸であれ、国内自生であれ、少なくとも言えるのは、弥生時代前期の近畿地方の北部と中央部で区画墓が墓制として採用され、それぞれが発展したという事実である。これは、国内自生であれば言うに及ばず、たとえ区画墓が大陸起源であったとしても、それを受け入れ発展さすような“社会背景”が両地域に存在したということである。現時点では区画墓の起源を不問に付し、区画墓を受け入れた“社会背景”についてのみ述べることは有益であろう。結論的に言えば、区画墓の立地が象徴する死生観＝宇宙観は、農耕文化を本格的に受容した列島社会の中で出現してきた新しい集団関係(＝社会)を支える観念の一端を構成するものとして機能したと考える。農耕文化の受容・定着により、定住の度合いが比較的少ない縄文社会から、耕地に固定されて定住を行なう弥生集落が出現した。弥生集落は新たに耕地を開墾しつつ、従来の狩猟採集経済段階の集団関係を支えていた集団領域(テリトリー)の中や、その集落の進出以前に形成されていた農耕集落群の集団領域の中に侵入し、既存の集団領域の関係を破壊し、その再分割や再定立を行なう必要性を引き起こした。さらに、稲作を行なうことで安定的な収穫がもたらされ、これによる人口増や人口密度の稠密化が、この混乱に一層拍車をかけたことであろう。こういった政治・経済的に大きな変化を遂げつつある、新しく生まれ変わっていく集団関係を地域社会の中で構築して行くために、新しい観念体系の一部としての新しい死後の観念が必要とされたのであろう。

近畿地方北部にあっては、政治・経済的に実権があったかどうかは別にして、台状墓は集落(または集落“群”)の首長・祭司の墓所として、それらの成員を統合し連帯感を生み出すために、同族意識の“シンボル”として機能したのであろう。首長・祭司といった少数の人間をシンボル＝代表者として集落(“群”)をまとめるためには、平面的な死後の世界観という旧来の死生観——生と死の平等的な関係性を打ち破り、死後の聖なる世界を一部の人間だけに付与する必要があり、その結果、形式においては山地に墓所＝聖地が選ばれたのであろう。他方、近畿地方中央部にあっては、周溝墓を造る・造れないという二様の家族の存在は、集落成員のうち“周溝墓を造る家族”間の“同等意識”を周溝墓の築造によって表現することで、集落内の秩序を新たに保とうとしたのであろう。累世的に造られる単位墓群は、代々に受け継がれていく家族の“地位”を表現していると考えられるのである。それぞれの地域が、どのように農耕文化を受け入れて行ったのか、それに伴う社会の再編成にどのように対処したのかが、台状墓：周溝墓＝山地：平地という墓制に表れているものと考えられる。(注7)

丹後地域に網野町銚子山古墳や丹後町神明山古墳といった日本海側屈指の前方後円墳が造られ“前方後円墳体制”に組み込まれた後も、近畿地方北部の“山地に墓を造る”という行為は存続した。しかも、台状墓の築造数は“爆発的に”増大すると共に、地域的にも丹波地域を包摂するようになる。これは、台状墓を築造する“階層”が拡大し、集落内の有力世帯家長とその家族も台状墓に葬られたためと考えられる(岩松1992b)が、それに伴って“山地の墓”の観念も一定――たとえば、その被葬者層の拡大による山地の墓の神聖性の変化など、変容したものと推測される。それでも、“山地の墓”という根本的な部分は古墳時代に引き継がれていったが、これは、“前方後円墳体制”に地域社会が組み込まれたといっても、おそらくその上層部だけを取り込んだだけであり、“山地の墓”という観念＝文化は社会の深層を形成する基層の文化であったためと推測される。それゆえ、新しい世界観と秩序＝“前方後円墳体制”という“文化”を受け入れた後も、“山地の墓”という前代からの文化は新しい体制の中でも生き続けたのだ。この台状墓＝山地の墓は、古墳時代後期の横穴式石室の導入と相前後して造られなくなり、弥生時代に形成された近畿地方北部のこの地域特性は社会のさらなる深層に潜り込み、次の時代の社会へと受け継がれていったのであろう。こういった点に近畿地方北部の特性や、“前方後円墳体制”の性格やその限界と運用に地域的なバリエーションが垣間みれるのである。

5．まとめ

この小論では考古学的なデータから当時の人々がどのように台状墓または周溝墓を捉えていたのかを検討し、そういった観念の違いがその後の地域社会を大きく規定した“可能性”を指摘した。具体的には、台状墓と周溝墓を観念作用の点から積極的に捉え直し、周溝墓と台状墓の本質的な差はその築造方法にあるのではなく、その墳墓が立地した場所に本質的な違いがあり、この点にあの世とこの世の観念が両地域で異なっていることを見た。そしてこういった死生観は、各々の墓制が弥生時代の早い段階に出現した当初からそれぞれの地域集団の中に認められ、この死生観の差を反映して、それぞれの地域が異なった発展系譜を経て、それぞれの地域特性が形成されたことを指摘した。言うまでもなく、ある社会の発展は様々な要因の相互的な関連の中で規定されるものであり、久保が指摘するような環境的な条件を全面的に否定するわけではない。要は説明のための重点の置き方である。

しかし、問題も残った。観念と文化の関係は何か、観念が具体的に墓や土器などの考古学的な資料にどのように反映するのかなど、根本的な問題を不問にして論を進めた。今後の課題である。

(いわまつ・たもつ＝当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1　近藤(1977a)の弥生墳墓の整理以来、この考え方は基本的に変わっていない。

注2　都出(1979;1986)、藤田(1987)、一瀬(1991)など。

注3　近畿地方中央部でも山地の区画墓が造られているが、これは弥生時代後期に高槻市紅茸山遺跡、庄内期に奈良県宇陀郡榛原町能峠方形台状墓など山地の“周溝墓”が出現してくる以後である。

注4　うち：そとの構造化が、環濠を伴う集落の出現、水田の区画など、農耕文化の定着と土地の永続的な占有と関係があるのか、今後の検討課題である。

注5　弥生時代の台状墓の検出例は周溝墓と比較すると相対的に少なく、集落毎に築いたのか、何らかの単位――複数の集落や平野毎で台状墓を築いたのかなど、その造営単位は実際のところよく分かっていない。ここでは前稿(岩松1992b)との整合性を保つため、本文中のように集落毎の築造としたが、このあとの本文中の文意にあるように、将来的に変更を加えるかどうか検討を加えるべき項目である。

注6　新聞報道によると、韓国でも周溝墓が検出されたとのことである。詳細は不明だが、日本の周溝墓よりも古い可能性があるらしい。もしそうならば、周溝墓や台状墓が大陸起源である可能性が高い。『朝日新聞』1995年5月11日夕刊。

注7　さらに、近畿地方北部、あるいは中央部の区画墓の立地に縄文社会の死生観が反転または存続しているとするならば、そこには縄文社会を弥生社会がどのように取り込んで行ったのかが表れている可能性が指摘できるかもしれない。

参考文献(主要なものに限った)

一瀬和夫　1991　「墳丘墓」『原始古代日本の墓制』　同成社

岩松　保　1992a「墓域の中の集団構成―近畿地方の方形周溝墓群の分析を通じて　前・後」『京都府埋蔵文化財情報』第43・44号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

1992b「台状墓の階層とその展開―京都府北部の弥生・古墳社会」『長岡京古文化論叢』Ⅱ　中山修一先生喜寿記念事業会

大塚和義　1988　「縄文人の観念と儀礼的世界」『古代史復元　縄文人の生活と文化』2　講談社

岡田晃治ほか1987「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要　帯城墳墓群Ⅱ」『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』　京都府教育委員会

近藤義郎　1977a「古墳以前の墳丘墓――楯築遺跡をめぐって」『岡山大学法文学部学術紀要(史学篇)』第37号

1977b「前方後円墳の成立」『考古論集　慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』

久保哲正　1988　「丹後地域における弥生墓の展開」　『考古学と技術　同志社大学考古学シリーズ』Ⅳ　同志社大学考古学シリーズ刊行会

鈴木保彦　1984　「集落構成」『季刊考古学　縄文人のムラとくらし』第7号　雄山閣出版

瀬戸谷晧編1987　『兵庫県豊岡市北浦古墳群・立石墳墓群』　豊岡市教育委員会

瀬戸谷晧・宮村良雄ほか1989『駄坂・舟隠遺跡群　豊岡市文化財調査報告書』22　豊岡市教育委員会

平良泰久・黒田恭正・常盤井智行ほか1983『丹後大山墳墓群　京都府丹後町文化財調査報告』第1集

丹後町教育委員会
田中光浩・林和広1982『七尾遺跡発掘調査報告書　京都府峰山町文化財調査報告』第８集　峰山町教育委員会
都出比呂志1979　「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第３号
1984　「農耕社会の形成」『講座日本歴史　原始古代』１　東京大学出版会
1986　「墳墓」『岩波講座日本考古学　集落と祭祀』４　岩波書店
福永伸哉　1989　「古墳時代の共同墓地―密集型土壙群の評価について」『待兼山論叢史学篇』第23号　大阪大学文学部
藤田憲司　1987　「方形台状墓」『弥生文化の研究』８　雄山閣出版
増田信武・田中光浩ほか1978『カジヤ遺跡発掘調査報告書　京都府峰山町文化財調査報告』第５集　峰山町教育委員会
村田文夫　1985　『縄文集落　考古学ライブラリー』36　ニュー・サイエンス社

付記

脱稿後、大阪府豊能郡能勢町の原田遺跡で弥生時代中期の“尾根の上の周溝墓”が調査されたことを知った。この墓は、周溝墓と呼ぼうが台状墓と言おうが“山地の墓”であることは間違いなく、周溝墓の分布と台状墓の分布を対立的に捉えた小論の内容に大きく関わる事例である。詳細は不明であるので、この資料を巡る議論については今後の課題としたい。（『原田遺跡発掘調(ママ)現地説明会資料』能勢町教育委員会　1995.11.11）